

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

大井川流域、大井川鉄道の開発者

中村円一郎

大井川は、南アルプス間ノ岳(標高：3,189メートルで日本で4番目)から、険しい山岳地帯を経て駿河湾にそそぐ延長168キロメートルの河川である。江戸時代、駿府城や江戸城を防衛する役割のため、大井川の渡河は、馬や人足を利用して輿や肩車で川越をして、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と言われた。



現在、大井川の水は、水力発電、上水、農業用水、工業用水など多目的に利用されている。今月号は、明治以降、大井川流域の①茶の製造、販売②水力発電の開発③大井川鉄道の建設などの産業開発事業に大きく貢献した中村円一郎を紹介する。

◀中村円一郎像

## パリ万国博覧会の日本喫茶店管理者として貢献

中村円一郎は、1867(慶応3)年、静岡県榛原郡吉田村(現在：吉田町)に生まれた。父・円蔵は、横浜開港と同時に海外貿易に茶を手掛けた事業家であった。円一郎は茶の製造、販売を引き継ぎ、1891(明治24)年に静岡県茶業組合連合会の議員に当選し、明治26年に会長に就任した。そして、1894(明治27)年に中央会議員に当選し、同年、日本製茶株式会社を設立した。この会社は、茶の貿易に外人商館を通さず、直接外国と輸出を行う商社で、

社長は横浜商工会議所会頭を26年間歴任した大谷嘉兵衛が就任した。

円一郎は、1899(明治32)年にパリ万国博覧会の日本喫茶店管理者となり、翌年、欧米各国の茶の需要状況などを視察した。帰国後、この体験を生かし茶の品質向上や研究のための施設を造るなどした。これらの貢献が認められ、1916(大正5)年に、勅定緑綬褒章が下賜され、貴族院議員となった。

## 日英水電(株)の地元側創立委員に就任

日英水力電気株は、1906(明治39)年に副島道正、樺山愛輔、園田孝吉、朝吹英二、益田太郎などが国政財界人や、イギリス人のチャールズ・シュルツらを発起人とする日英共同

事業として計画され、資金もイギリスでの調達を企てる構想のもとに計画された。(参考：日英同盟は、1902年に締結され、1923年廃止されるまで日本の外交政策の基盤となった)

この会社は、東京を中心とした半径150km以内の発電水利地点の調査を行い、①大井川水系の梅地・井川計画、②榎島(さわらじま)・保村(たもつむら)計画、③牛ノ頸(うしのくび)計画を含む水利権と東京市および隣接5カ町村に対する50馬力以上の電力供給権を獲得したが、英国側が撤退し開業するに至らなかった。なお、この会社は1921(大正10)年、早川電力(株)と合併し、大井川上流の水利権と、電力供給権は早川電力(株)に引き継がれた。

日英水電(株)は、日英水力電気(株)の日本側委員が創立者となり、1910(明治43)年、資本金25万円で発足し、取締役社長に榎山愛輔、取締役に園田孝吉、中村円一郎らが就任し事業化を進めた。そして大井川3地点のうち、開発が一番有利であった牛ノ頸計画を含む水利権を譲り受け、大井川で最初の小山発電所を完成させた。この発電所の最初の計画は、島田紡績を創立した鈴木久一郎が1897(明治30)年から調査し、用地取得まで至ったが実現しなかった。その後、前述したように日英水力電気が計画したが途中で挫折し、日英水電(株)によって建設された。

小山発電所は中部5県下で最初のダム水路発電所で、大井川が馬蹄形に大きく湾曲する通称牛ノ頸地点から、50mほどの水路トンネルを掘り、有効落差25mを得て、出力1,400kWを発電した。発電所跡が大井川鉄道の終点千頭駅から6kmほど上流に残っており、水路鉄管跡等を見ることができる。水車2基は英国ボーピング社製(リアクションタービン・1,300馬力)、発電機2基は東京芝浦製作所製(3相交流3,450V・60Hz・700kW)であった。その後、1936(昭和11)年、下流約10km地点に大井川発電所(出力: 68,200kW)の完成に伴い廃止された。

これより先、中村円一郎は浜松電灯(株)の鈴木幸作社長と折衝を重ね、両社は1911(明治44)に合併した。そして金谷に金谷変電所を



設け、小山発電所の電力を33kVの送電線で大井川の下流域から島田周辺、浜松方面まで送電し供給した。当時、浜松は繊維工業をはじめ諸工業の発達が進み電力需要も増加していた。このような電力不足の中で、浜松市野口町に火力発電所(大正2年運開、出力: 1,000kW)、愛知県矢作川水系に巴川発電所(大正5年運開、出力: 1,500kW)、白瀬発電所(大正9年運開、出力: 1,119kW)を建設し供給区域を拡大していった。

このように、日英水電は設立の経緯から日



小山発電所跡

英という名がつき、当初、中央財界の人たちが経営を担ったが、その事業は大井川の電源

開発を行い、浜松から遠州一帯に電灯電力を供給する会社になった。

## 大井川鉄道の建設

大井川上流の木材、旅客、電源開発の輸送などを目的に、1918(大正7)年、駿府鉄道株が静岡市に設立された。当初のルートは静岡～千頭間で計画された。しかしこの鉄道事業が容易に進まぬ中、金谷町の有力者が資金を出し、1922(大正11)年、発起人会を開き社名を大井川鉄道株に改称し、社長に中村円一郎が就任した。続いてルートを現在の金谷～千頭間に変更し、建設工事を始め、1927(昭和2)年、金谷～横岡間(6.4<sup>キロメートル</sup>)を開業して船運で資材を運び、その後、難工事を経て、1931(昭和6)年に金谷～千頭間(39.5<sup>キロメートル</sup>)が全通した。

これを完成させた中村円一郎の銅像が川根本町総合支所前の小高い丘の上にある。眼下に千頭駅、大井川を見ることができ、碑文には「大井川鉄道は川根地方における産業文化の啓発を使命とし、金谷～千頭間延長40<sup>キロメートル</sup>に亘り敷設された。沿線は一帯に山岳相迫り、河川相接してまれにみる難工事である。遠州吉田の人貴族院議院従六位中村圓一郎氏は、創立委員長および社長となって東奔西走して

### 中村円一郎 略歴(1867～1945)

1867	慶応3	静岡県榛原郡吉田村神戸で生まれる
1891	明治24	静岡県茶業組合連合会議員に当選
1893	明治26	茶商協会発足、会長に就任
1899	明治32	パリ万博日本喫茶店管理者として渡仏
1906	明治39	日英水力電気株式会社、創立事務所を開設
1910	明治43	日英水電株式会社設立、取締役役に就任
1910	明治43	大井川水系で最初の小山発電所(出力1,400kW)完工
1916	大正5	勅定緑綬褒章を下賜される。貴族院議員となる。
1925	大正14	大井川鉄道株式会社創立総会、初代社長に就任
1931	昭和6	大井川鉄道(金谷～千頭間)全線開通
1945	昭和20	享年78歳で没す



中村円一郎像の展望台からの千頭駅、大井川

この鉄道の完成に努力せられ本日をもって全通を見られるに至り、ここに氏の功績を永遠に表彰す」と書かれている。この像は、戦時下に撤去、供出されたが、1961(昭和36)年、金谷、川根、中川根、本川根町、大井川鉄道株式会社によって再建された。

このように中村円一郎は、茶業、大井川の電力開発、大井川鉄道の設立など大井川流域の発展に尽くし、1945(昭和20)年、享年78歳で生涯を閉じた。

なお、簡単な年表は次のとおりである。